

## 四方の留粕の序

此あかは吾が酒ならず、四方に知る赤良のうしの醸みし酒ぞ。うまらに  
をせさくさくおせくと流行唄に浮れたりし、安永のむかしはじめて  
滑稽の口をひらきて、狂薬好むたはれ人にすくめ、手酔あしゑひ酔くる  
はせ、一筋の路をともしに踏ませしより、千鳥あしの跡久しくとどまり、  
今も昔にには鳥のかつしか早稻のうま口なる、大人の新醴もがなと、ふ  
みのはやし杉をしるしに、たづね来る人日々に絶えず、けに戯もんざ  
うは年月にさまかはりて、あらたなるをかしとおもふ習ひなれば、何  
とかやの酒の十とせを経て、損ねざるも、口なれたるは珍らしからず、然

りとて酒つくる才なき人のしほり出したるは新しきも味ひなし。かくては何をもちからとしてたはれうたをうたひ、戯れ文をつくるべき。瓶のつくるは蟲の恥とかいざたまへよき酒乞ひにと、書屋と共に大人のみにとに参りて、此殿の奥の酒屋のうはたまり、あはれ中酌をだにと乞ひもとめたりしに、留粕といふ物四十枚ばかりとう出て、かう僕くさきものながら、幸ひに接骨醫師の泥鏝にもかゝらず、漬物店の桶にも入らず、爰に留粕のとまりて久しきが、さすがに人酔はすべき所なんある。かの劉伶が寝むしろに敷憶良の太夫の寢酒にあたくめけんやうに、からの大和のねごといひ出すたねともなるべくは、そのしるをすくり、その糟をくらひて、ふみ商人の腹をこやさせよと、投げあたへ給へりしを、や

がて寧樂の櫻木にふらせて、糟塔のかけず崩れず幾久々と南總館の  
あるじとともに禱くるほすも、まづ粕の匂に酔へるなるべし。

文政二年己卯正月吉日

四方歌垣眞顔





# 四方の留粕上

## ○狂歌新玉集序

何がし尊者  
—迦葉  
くどに—瞿  
曇釋迦  
微笑—釋尊  
手に一擧を  
拈起す迦葉  
見く微笑す  
釋尊遂に之  
に正法眼藏  
を附囑す  
翁—孔子

久かたの天、輕口をひらき、あらかねの地、おも口を結びしよりこのかた、神代のむかし、あまの鈿女の乳房には、猿田彦もたなうらをうち、月のみくに、何がし尊者の花には、くどにも微笑をゆるし給へりき。されば、麒麟に感ぜし翁も、時ありて笑ひ、胡蝶となりし癡者も、笑を大方にとらん事を恥づ。青樓の春の風に、ちがのこがねの笑をかひ、廬山の雨の夜に、三つの笑ひの友をしのぶなど、いづれか笑のたねならざる。わきて新玉のとしたちかへる旦には、山も笑めるが如しとかや。花になく鳥追も、笑上戸の盃をあげ、ちまたにうたふ萬歳も、舌鼓をなんうちそへける。やゝ春ふかく笑をふくむに至りては、柳はみどりの眉をひらき、梅は白きはもとをあらはす、はるの詠めのくさぐさの歌、ざれたる事、たはれたるふりをのみ書い連ねたるしりに、舊年の暮のしま

癡者一莊子  
 廬山の雨の  
 夜一晉の惠  
 遠法師虎溪  
 三笑の故事  
 飛鳥川の  
 古今の序の  
 詞を用ふ

八斗の才藏  
 一謝靈運  
 曰、天下才  
 共一石、曹

ひのをかしき笑ひの中に、つるぎたち博士も智をうしなへるが如く、武士の道もかけこ  
 ひにはたられし、世のいとなみのたゞ事まで、つゆ記して一卷とし、名づけて「新玉狂  
 歌集」といふ。斯くおとがひを解きぬれば、飛鳥川の淵はせくらわらふとも、さざれ石  
 のいはほとなりてこけ倒るゝほど、うま人のうまきわらひや、いづこのやい太郎冠者、  
 あらにもたらぬ我等まで、この時に生れあへるをよろこび、弓は袋に、笑ひ晝は櫃にを  
 さまれる代に、腹鼓うち、のどけきあしたに御茶をわかして、わらはざらめや、たのし  
 まざらめや。

○狂歌千里同風序

改年の御慶千里同風、いづかたも同じ御事にいはひをさむる中にも、たはれ歌の道なか  
 に、さざれ、さざれと呼びあつめたる飴賣引の、いと口きれぬざれごとども、みな櫻  
 飴の色をふくみ、ことごとく分銅の玉をみかく。智恵の袋のよねは八斗の才藏をあざむ  
 き、言葉の泉の盃は、百千の鳥追をまねぶ。都となく鄙となく、巧みなるもつたなき  
 も、手鞠の歌の数あけてかぞへがたく、針うちの紙のあたへ、これがためにたふとし。

子建獨得八斗、我得一斗、自古至今、共用一斗、俗耳の一管の戴顯鶯の聲を聞きて曰く、是俗耳の鍼砭詩腸の鼓吹なりと萬物の大芝居―天地間一大戰場、康熙帝の文句きの字―き字屋、吉原の青樓に料理を供せし

木でもかねでも俗耳の耳かきにあたり、鼓と吹ものと詩腸のはら合によるし。これなんのぞけ長閑き御代をうたひものせる、擊壤の歌の初音ならんと、鶯笛のひとくく、羽子のこゝろを九十二みそじあまり、若草のところまだらに書いつけぬれば、かへる雁の跡なが先なも侍らんかし。

### ○龜樓狂歌會序

そも天地は、萬物の大芝居にして、光陰は百とせの居つゞけ客なり。はつ日の鼠木戸、留場のとめてとゞまらず、狂歌の大門口、會所の會たゆる事なし。けふなん壺屋の淡雪きえ、袖の梅の香をふくみ、春風のふく山三階のたかどのに満ち、言葉の惣花内證のはり札にひらく。舌つゞみの太鼓について前へくとすゞみ、ざれ歌の諸君このところへ出て遊ぶ。御老人様しづかに跡よりいたれば、御町中様ますく御機嫌よく、武士も長道具をわすれ、醫者の外乗物もちひす、張子のお馬お駕籠でこす、名におふかり橋三曲にまがる、すみだ川のむかふの人く、龜やに人く、こんなく、うき木の龜や優曇華の對面は今日が初日にして、むれつゞきの字の題詠は、年中月次の紋日、廿日頃

家の名  
くどうもく  
どうもー遊

女の文の常

套語

すり鉢をー

この所古今

の序の詞を

用ふ

驚ーせつか

い

元の木網ー

狂歌の先賢

なり

唐土の鳥ー

七草のはや

し詞

たちうりー

切實

よりみせをひくまで、入りくるく大入の會、くどうもくどうも此會に、おや馬鹿らし  
うおさざらめや。

### ○歳旦年鑑序

たはれ歌は人の笑ふをのみ種とせしが、いつしか實のあるやうにぞなれりける。こゝに  
京町かほ茶の元成、ふかく此道をたしみて、すり鉢をかく驚、ながしのしたの蛙まで、い  
づれか徒をいはざりける。されば遠慮もないしようの客、るろりの枝すみ折々にたえず。  
けふなん智恵も淺草の、市にたつたるおすがたの、をかしきふりのすき人等、籠のもと  
の木網を、室咲の梅の花棒として、手桶のたがのわれもくと、おみきの口々よみ出せ  
るさま、俳諧にあらす詩にあらす、唐土の鳥と日本つつみ、渡らぬ先の春がすみ、其た  
ちうりの瓢もよく、たうなすのとをはたみそ、よそくしう書いつくることとはなぬり。

### ○めでた百首夷歌序

抑めでたいと申すは、天竺にても始まらず、大唐にてもはじまらず、我が日本の夷三郎、



見ぬ京物語  
一 諺  
鐵砲一河豚  
の異名  
何がし一三  
國の司馬徽  
ほり一堀、  
欲  
なるとばれ  
一和漢三才  
陶會に、俗  
傳西海鯛、  
春夏越阿波  
鳴門、入播  
攝之地者、  
大骨生瘤焉  
三ツ道具一  
鯛の骨に三  
道具といふ  
あり

めでたいつりの絲より鯛、此めでたいを釣上げしより、めでたい事のかゞみ鯛、末の代  
迄も引出だす、延喜の御代のひだひ箱も、蓋あけて見ぬ京物語、今や四つの海波靜にし  
て、沖釣のめでたいかまらぬ日なく、十日の雨風さはりなくして、一升のつちくれ金一  
升の富にうるほへり、されば弓は袋棚の上にすまけ、お太刀はさやがたの小袖に纏はれ、  
甲冑は笑道具となり、鐵砲は藥、ぐひのたねがしまとなり、酒は酒屋に、餅は餅屋に、  
たけき親分も太平樂をならべ、あやしの百性も萬歳をとなへて、誠にめでたう候ひけると  
は、今この時をや申すべき、斯かるめでたき御代なれば、かの唐土の何某が、何でもか  
でもよしといひし跡を踏むとはなくて、夜も晝もめでたいといふ事を口癖にし  
て、めでた男と名だたる人あり、われも又めでたい事をほり川の、流のまゝによみ出せ  
し、めでた百首のたはれ歌を、めでた男に示さんとて、覺えずひとり笑ふ門に、今福と  
いふ書林の來りて、春まつ花の櫻鯛、あまだひの普くつたへ、鯛石のいはほともなると  
ほねのなみくならぬ、めでたい中の鯛のあらを、三ツ道具のすきものと共にせんとい  
ふに、まづ手をうつておきつだひ、いく千代かけし掛鯛の、尾めでたいと見給へかし。

○太平樂卷物序

婆羅門組—  
江戸の男達  
に婆羅門組  
あり  
燕趙—燕趙  
悲歌士

橋詰まで出  
てもらはふ  
—俠客等の  
喧嘩の常套  
語  
ないじやア  
云々—當時  
の常套の戲  
言

天然の婆羅門組は、偏袒右肩片はだぬいで、せんだまどろぎや何んの事だ、と張込めば、もろこし燕趙ひかぬ氣の俠者は、ちんふりかくさく、ちんないらう、しやぐわんくでけつかれとほざく。わが日本は柔和理と、あなにへやのうま事から、二柱の親指が國々の小指を生み給ひしより、二千年來お御興をするた蒼生、唐天然にけちりんほども、ひけをとらぬ太平樂、其太平の御代につれて、此頃はやる狂歌師の、とつと昔のお師匠さん、曉月房が「酒百首」に、

酔うてのち太刀ぬく人は酒の人太平樂を舞ふかとぞ見る

といふ句があるが、太刀をぬくだけまだ野夫だよ。抜くべき處をぬかりんと、ぬかぬ太刀の高名は、虚はないてふ本所の親分、相生町のはえぬきの桃栗山人、「太平樂」の一卷に、ちよと兩國の橋詰まで出てもらはふ、と聲懸られて、かた山の手も足もない、よもやに懸る巻のはしに、是がじよさいの序の字でも、ないじやアくくくないか。

海老藏一俳  
優市川海老  
藏

登蓮一雨の  
晴間を待た  
ず渡邊の聖  
の許に物習  
ひに行きし  
話（徒然草）

半日の閑一  
父得浮生半  
日閑・唐詩  
の句

### ○江戸花海老序

めでたくの若松さまよ、枝も榮えて葉もしける、その千代の子の目出たき顔見世、名もあらためて海老藏と、尾鰭をふつてふりしきる、時雨のあめの晴間も待たで、登蓮ならぬ東牛子と、四方山の手のかた隅から、住吉町の成田屋を訪ひはべりしに、主は盃とありあへず、折からの新酒みさかなに何よけんと、あつ蕎麥のあつき遇にて、天地一大戯場の外に、又四疊半日の閑を得たり。いでや最負の腕をこく、吾黨の連中のはなしの種ともなれかしと、此度おくれる狂歌の受取、自筆をとつて梓に鏤め、世に傳ふる事左の如し。

### ○仙術影畫はりこの虎の巻序

抑仙術影人形は、人の目玉をくらま山、まつくらやみから牛若丸、鬼一法眼の弟子となり、ちよくらをもつて娘をあやなし、得給ふ所の「虎の巻」新かけ流のかけ人形、一子相傳の祕書として、おそばさらすの影辨慶にさづく。其後辨慶衣川にて、立往生のかけ法師、水にうつれる姿を見て、なんだら法師の柿のたねと、とつかへこうと鳥がなく、あ

かげの病一  
 離魂病  
 おかげでぬ  
 けた一お蔭  
 参りとして逃  
 走して伊勢  
 参宮するな  
 いふ  
 こんなかげ  
 畫が一こん  
 なえにして  
 唐にもある  
 かの洒落  
 一つ御覺え  
 云々一大道  
 賣の聲色  
 今きりかけ  
 たは一思臣  
 藏七段目の

づまの方の去御屋敷にて、此書をもとめ得たり。夫影の數さまなくにして、かけまかけ  
 みせ影芝居、かけばりかけ膳かけ日向、月影日影花のかけ、松かけ帆影柳かけ、山かけ  
 木かけみかけ石、鳥かけとかけかけの病、歳旦帳に初日影、勘當帳はわかかけの至り、お  
 かけでぬけた伊勢参、七尺去つて師匠のかけ、人ごといへばかけがさす、形にかけの廻  
 燈籠、まはつて来たはく。親も景時寸も景季、かけ清かけ政勘解由左衛門、湯かけん火  
 かけん匙かけん、かけの奉公かけ這入、芝から神田のかけ祭、七つのかかけの將門が、鬼か  
 けといふ名馬にうち乗り、木の下影を宿として、物かけくまなく搜しても、こんなかけ  
 畫が唐にもあるか。日本一のかかけ勝團子、ひとつ御覺えなされても、月待日待庚申待、  
 御人影のすたらぬあそび、見るかけもないかけとは違ひ、ちつともお影のない商賣と、  
 思ひつくばの山うりが、しけき影畫の長口上、お立台の御方御用はござりませぬか。  
 右に顯すかけ人形は、すつと口もとの處にして、初學のいろはに本屋の望み、此外かけ  
 角力の四十八手、相馬の將門七ヶ條の傳、日待の夜食の夕さりあるいて、どじよ踏みな  
 らふ驚の足どり、今きりかけたは兄さんか、あぶ内々のお縫が祕説等は、予が家の奥祕  
 なれば、猥に他見をゆるさず、御執心の御方は、來つて口傳を調給へ。處は鐵砲町の百

お輕の臺詞  
壹分自慢—  
自負する所  
あるをいふ  
八人藝—盲  
人

春の朝—百  
今の序の文  
句に擬す  
正燈寺—同  
島にあり、  
當時の紅葉  
の名所  
耳搔寮—了  
の字を古く  
耳搔れうと  
いへり、其  
を箕輪の寮  
などにきか

丁目、あいた口から出格子にて、おやく〜どう四郎が隣、とんだや萬八か筋向う、雪隠  
がくさい店ちんが高い。弟子入が五百疋、盆暮か千疋宛、暑寒は御心持しだい、秘傳の許  
は七兩貳分、壹分自慢の座敷藝、八人藝の目のあく法もあれ、八天狗の鼻をそぐとも、是  
が出来たらしてごろうじろ。打身くじきが鋤療治、けがの基と笑はば笑へ、飽くまで食ひ  
媛に著る、上つ方の御目覺し、お千様のはらつこなし、之をするも猶己にまさらん。

### ○飛花落葉序

春の朝、中の町にちる花を見て、山屋豆腐の雪かとうたがひ、秋の夕正燈寺の落葉をわ  
けて、淺茅が原のつゆをあはれむ。ここにとどこかの風來山人、一文紙鳶の繰きれしより、  
かきおかれたる狂言綺語、讚佛ならぬ六部集など、すでに書林の櫻木にはひて、茶屋  
にことわる紙花のごとし。たゞ相對の紙花は、風前の塵とひとしく、「根なし草」の根に歸  
らず、廊下座敷の簾にはかれて、終に砂利場のすきがへしとならん事を悲しみて、千早  
振かみ肩を、くれ竹のよく拾ひあつめ、近からんものは目に見なんし、遠からんものは  
音にきく、耳搔寮の腰張の張交とはなしぬ。

せたり  
きんくた  
る一通めき  
たる  
一狐の腋一  
千羊の皮は  
一狐の腋に  
しかす、支  
那の諺  
誠に千金一  
秦の昭王假  
千金の狐の  
裘を藏せし  
話  
漢に遊女あ  
り一詩經の  
句  
貝多羅一貝  
多羅葉、ば  
いた(賣娼  
婦)

○現金論序

いへしへ穴の中にすまひ、恙の用心計して、酒麩一枚もたぬ世はいざしらず、其後吳服の二女、唐の請人人主にて、日本の飯につきしより以來、開帳で見た十二二重、羅さまの装束はいともかしこく、麻上下の巍々たる、黒仕立のきんくたる、衿袷の身柱もとから、裾はきの踵にいたるまで、其情をのべ其穴をさがして、百馬があらはす一狐の腋、誠に千金かけ直なし、正札附といひつべし。嗚呼天人の羽衣も、青樓の跡著にしかず、吳綾蜀錦も三ヶの津の貨物にしかすと、むかしの人の鹿綺羅を忍び、今の通の見え坊を歎じ、かけ硯の向うから聊筆を染むるのみ。

○唐來參和戲作の序

夫支那の地まはりは、漢に遊女ありとうたひ、天竺の貝多羅は、街賣女色と書きのめす。わが日本のふたはしらは、床柱にもより給はず。蒼海原の青傘に萌黄さなだの紐解いて、出合のひとつ穴にえやと、天神七代御代參、地色ばかりをかせ給へば、人の

御代參一奥  
女中など主  
君の代りに  
神佛に詣づ  
るに托して  
淫行ありし  
なり、天神  
七代地神五  
代の洒落  
雲井の菊一  
久方の雲の  
上にて見る  
菊は天つ星  
かとあやま  
たれける  
迷惑星一焚  
惑星のしや  
れ  
やつと星一  
をぎりのか  
け聲

代となりて、「伊勢」「源氏」の物語にも、ゆびきり髪切の誠なく、二條の后若紫も、おいらんの意氣地心もとなし。今や京の女郎に江戸の張をもたせ、長崎の衣装をきせて、大坂の揚屋で遊ぶ、自由自在の樂を得る時にあひて、和漢の人の大一座、晦日の月のまん丸山に、むすび卵子の四角な文字を、唐來參和といへる中位なる色男、あらゆる贅にかきねの外、ぶらりとさがる瓢箪で、鯨をおさへた大あたりは、慥成るものから、我等請人にたつものならし。

○金銀簀篋内傳序

謹んで管から天ぢよくを窺ふに、雲井の菊を天つ星とあやまち、老父の顔を梅星かとうたがふ。爪に出るを物著ほしとよび、軒端につるを甘星といふ。外躑躅星は内躑躅星にちかく、竿ほしは物干にかゝる。丹星は太々講中の爲に抽んで、揚星は遊女の迷惑星たり。津輕の分野に臘腸星、松坂こえてやつと星、是らは二十八宿の、問屋仲間にあらず。茶宇の袴の星入の類なるべし。このごろ星見世の書肆何某、「簀篋内傳」を携へ來て、頗に序がほしいといふ。是又金銀開運の種なるべしと、星をさすこと然り。

○通言無茶揃序

名妓の言の葉ならんや  
—人は武士  
なぜ傾城に  
いやがられ  
の意

通神十八代  
—所謂十八  
大通  
阿字—鏝

武は戈を止るとは、蓋典舗の藏の内にして、花は三芳野人は武士とは、豈名妓の言の葉ならんや。されど長壽臺の安きに居て、猪牙船の危を忘れざるも、太平の代の御子様かたに、昔のきつたりはつたりを見て、今の悠々寛々を知らしめんと、おもひつき地のそねならで、芝全交がきたへし名作、それから御覽なされよと、さしつけられて、お小柄はありやなしやとしかいふ。

○和漢同詠衆序

天神七代地神五代の宿に、通神十八代といふ時ありき。この時世界通にして、天然にては大通佛、唐土にては漢通とも、梵字の阿字の夕河岸を藝びやしにし、文字の四角な玉子を、ふはくにして飲みかけければ、まして和國のいろはにはへと、ちりてつとんと連彈の、口三味線の調子にのる、二道行和漢同詠衆。唐もやまとも色事の、中は丸山たゞ丸かれと、思ひそめたる筆ずさみ、時代をおして考ふれば、凡そ十千萬八千年以前、



魯の季桓子の云々一家語に見えたる咄  
牛に汗し  
汗牛充棟  
石燕叟一鳥  
山石燕  
箱根から先  
一箱根から  
手前に野暮  
と怪物はな  
いといふ俗  
諺  
妄言一莊子  
に、我汝が  
爲に妄言せ  
ん汝之を妄  
聽せよ

わいく／＼天皇の御宇にあたりとぞ。

### ○續百鬼夜行序

子怪力亂神を語らずとはいふものの、口の下から木石の怪を變廻魘、水の怪を龍、土の怪を羴羊とは、魯の季桓子の井戸の中から、羊を一疋掘出して、問ひたる時の御挨拶なり。されば中華の歴々たちの書きおける、「山海經」を始として、「搜神」「述異」の諸記録ども、うそ八百の百物語、闇から出る牛に汗し、チャ堂上の棟に充てり。今此「續編百鬼夜行」も、石燕叟が繪そらごとを見て、摸捫窩の口あいたまかせに、ある事ないこと書き集めぬれば、もし箱根から先にすむ、石部金吉金兜、かぶりを掉つて嘲るとも、だんだんない大事ない。ない物くはふの化物嘲、東坡か野人と話せし如く、しばらく是を妄言せん。それ妄聽して可也。

### ○百鬼夜狂集序

あやしきを見てあやしまざれば、「左傳」の化物ばなしも啞らしく、怪しきを見て怪めば、

鬼神をも挫  
ぎつべき體  
—古き歌學  
にて定めた  
る歌の一體  
狂へる水—  
酒  
がござ—奈  
良の元興寺  
の鬼道場法  
師に退治ら  
れし故事よ  
り小兒の戯  
に恐しき顔  
してがござ  
にかまきう  
といひく人  
を威すこと  
ありし也

六部の地獄の沙汰もまことならん。今の學者のおし事と、坊主の不思議すきより、あやしきをあやしまず、かへりて怪しからざるをあやしむ。それ月日の眠風の息、雲の鬚雨のあし、海山かけてよく見れば、天地の間もまたひとつの化物屋敷ならずや。うば玉の闇の夜に、百のあやしき事を語れば、かならず其驗ありといへる。ふる事に本づきて、此頃たはれたる歌の友どち、鬼神をも挫ぎつべき體に、狂へる水をうしろだてとし、富が岡の北深川の東、青きともし火の油堀のほとり、鬼一口にわんぐらとか言へる、何がしの御莊にして、物語を狂歌にかへ、其數百に滿てり。もとより箱根よりこなたに野夫と化物なし。ないものは食ひたく、こはい事は見たし。よりに奈良のさくら木にちりばめ、子どもだましのがござにかませぬ。讀むものこはきや、はたをかしきや。

### ○野夫鑑序

穴の中に貉あり、これを得んと欲するにたし。一人曰く、貉は睡を好むものなり。試みに枕一つ酒一徳利、生姜味噌一片、細引を附け穴の中におろすべし。貉酒を飲み、ところと枕を引きよせ一寢入する處を、かの細引にて縛る時は貉を得べしと。一人曰く、

穴の中に貉  
一語に穴の  
貉  
後世家、古  
方家—古の  
漢方醫の流  
派別  
其次の羅漢  
は—羅漢遊  
びの詞  
跡のくく—  
小供遊びの  
詞  
せんじやう  
常の如く—  
薬包の注意  
書の常套語  
ふた夜の月  
—九月十三  
夜の月

これ甚だ迂遠し。井戸釣瓶を落せし如く、細引に碇をつけ、穴の中をかき廻すべし。貉の目鼻か、體の中へ引かけぬ事あるまじ。とり逃しは仕方なしと。一人曰く、所詮むじなは人を魅すけものなり。人間の智慧才覺にて、効を奏する事かたがるべし。其細引を縮にして、穴の口にて三味線を引き、つろなく、貉をつろなと浮かす時は、萬に一つもまぐれ當り、貉を得まじきものにあらざと。按ずるに腹の中の病は、穴の中の貉にあらずや。始めの一人後世家也。其次の羅漢は古方家なり。跡のくくせんじやう、常のごとくの匙加減、古方ももなく後世でもなく、サウ事なしの山師の玄關、見ん脈びんくたる時は、胸だくくたる牽頭坊主のはやり醫者なり。駿河の國の富士の人あな、穴のむじなの「野夫鑑」、化生のもの、魔生のものが、いざ立ちよりて御醫候へ。

### ○繼華集序

玉くしけふた夜の月は、中御門右府の保延元年の記に見え、寛平法皇の明月無雙のみことより起れり。菅家の十三夜の詩は、三五十八の桁違ひ、十五夜の字のあやまりにして、兼好が妻宿の説は、八月九月の間の宿、さらに本宿と定め難し。十三夜の影古に

法性寺關白の詩一十三  
 夕影勝於古  
 數百年、光  
 不若今（藤  
 原忠通）  
 あきらけき  
 御代の昔の  
 一秋よりや  
 月し名にお  
 ふ今夜なる  
 らん

百になるま  
 で一諺に雀  
 百歳まで踊  
 忘れぬ

勝れりとは、法性寺關白の詩、あきらけき御代の昔の影よりやとは、「草麻集」の和歌、十三夜の月花やかにと、「源氏」の巻に出でたるは、あながちこよひの事にはあらず。たとへば「五雜俎」に田家のことわざを載せて、九月十三晴といふがごとし。此頃横川禪師の「京華集」を見れば、津の國住吉の社、この夕月なければ、巫祝の夜をつかさどるもの、かならず左遷せらるゝ事ありとて、齋戒沐浴する事つねに百倍すとなん。その「京華集」で思ひ出せり。九月十三夜を繼華會と名づくる事、建久二年に顯せし「眞俗交談記」といへるふみに見え侍り。きぬかつぐ芋の土くれをうち、枝豆のさやけき後の月を賞づるざれ歌を集めて、しきりに序を書けといふ。繼華會の名おもしろければ、「繼華集」とも呼ぶべしといふ。

○半天神集會序

あら玉のやうなる日の若みこの生れませる、正月のはじめこそ、竹に雀の百になるまで、五十の翁小躍りする時なれ。思へばむかし月代の空青みたる頃は、つね聞く鶏もわかかわかと、二日三日のきそはじめ、抱いてねの日の一丁の蠟燭、沅湘日夜東に、流れてはや

沅湘—沅湘  
 日夜東流去  
 不爲愁人留  
 少時、唐詩  
 の句  
 人の日—正  
 月七日  
 物の部の翁  
 一徂徠  
 ふること—  
 紗、降  
 亭子—宇多  
 天皇  
 市人—狂歌  
 師、草市  
 人  
 ことりづか  
 ひ—相撲の  
 招集使  
 四方のしる  
 し—蜀山人

く忽に、今日なんなくて七種の、日本の鳥と唐土の鳥の、わたらぬ先の聲聞けば、生れぬ先の心地して、みな大人の人の日なれば、かの物の部の翁のいへる、牛天神は大人なるべし。

○狂歌すまひ草序

そも相撲てふことのおこりは、たはれ歌したりぶりにも漏れにたる、野見の宿禰當麻の蹶速にはじまり、俣野河津のなき聲よりぞ、太鼓に雨のふることとはなりぬ。また歌合のはじまりは、亭子とやらの御亭さんにおこり、ついであつてん天徳のころ、判の詞をしるせしより、三葉よつばに富札の、「六百番」千五百番の出番附となれりける。こゝにいにしへの事をも、今のことをもはみあらし、千里の馬もわいだめつべき、名におふ市の市人ら、おのれがえてに最手をあげ、初會のお客をうら手とし、晴となく、雨となく、ことりづかひの鳥の子の、十日の筵をはり、四方のしるしのみつ巴、扇もてうちはに代へしむ。もとより西も東も知らねど、右から左否みがたく、つたなき心の内取に、出来合の判をくはへぬ。左右のかたやの人々ら、相撲とろなら、くはと雄たけび、まぐ

の印章

箕をつくる  
一家職をつ  
ぐことの喩  
丙丁童子一  
火災

とこの日、  
あわよく共  
に赤兒の戯  
を借りて詞  
のあやとす

れあたりの點にあへよといふ。

○職人部類序

そのはじめや、觴を浮べる江の流に筆をそそぎ、百の工のわざをうつして、梓弓つくれるものの子の、箕をつくるために備へしも、かたくななる丙丁童子のために奪はれ、心のたくみの老畫師も、今は廿國の底なき人の數にさへ入りぬるを、玉くしけふたゞび器を利くして、花咲く春の櫻木に鏤むる事とはなりぬ。よりにて其ことを冠師にかうぶらしめて、硯の海に棹さし侍るも、かの工のはじめ終りをしるし侍るものならし。

○江都二色序

わらはべの遊び物を畫きて（老筆子）と記せし圖あり。北尾氏の筆に寫し、弄翰子の狂歌を添へて、一つの草紙とはなりぬ。繪はとこの目を悦ばしめ、歌はあわよくの笑ひを催す。てうちてうちの拍子よき、はなしの鱗のしほの目に、かいくり出し絲口の、いと面白き筆を見て、硯の海の鱗形が、よき繪さうしの種なりと、思ふ心の花にかけて、兒櫻木に忍

かいぐり出  
し―同上

鱗形―鱗形

屋九兵衛

繪草紙の板

元

丁寛―漢の

人

名のみこと

ごとしう―

源氏物語の

詞をとる

何かし太郎

―桃太郎  
故事―旁色

る物ならし。明和十年睦月のころ、四方のあか人、飲懸山の麓に記す。

### ○送眞顔旅行詞

むかし丁寛とかやいへるもの、田何に従うて易をうく。其東にかへるに臨みて、易すに東すと田何はいへり。今狂歌堂のあるじ鹿津部眞顔、たはれたる業すでに成りて、四方の春秋に遊ばんとす。これなん狂歌東西南北すともいふべし。

### ○幼戯の圖の序

おほぢうばの物語は、虎關禪師の「異制庭訓」にしるし、鼠の嫁入猿の掣取とは、「雜山文集」の詞にも見えたるをや。かの三十年になるてふ花の、名のみことんういひけたれたる何がし太郎が物語は、うなひ子總角の頭さしつどへて、語りつき言ひつきつ、目に見ぬ鬼の住める國の、寶もとめしことぐさは、新羅の國の旁色とかやが、黄金の槌の故事も、うち出でつべし。なべて斯様のはかなき諺も、今様はむけに賤しくのみなりもてゆけば、うつし書にもおのして、しろきを後の戒ともなせりけんぞいとかしこき。

金椎子を得ること、酉陽雜俎續集しるきな後一繪事後素（論語）  
 兔一裘一兼明親王の薨後其の子菟裘の賦を帝に奉りしことあり  
 馬相如一司馬相如  
 うはおそひ一上をおほふ衣  
 鞞衣の百結一自<sub>水</sub>の文を襪<sub>襪</sub>の衣に比す

○鶉衣序

いにしへ安永のはじめ、角田川のほとり長樂精舎に遊びて、也有翁の借物の辯を見侍りしが、あまりに面白ければ寫しかへりはべりき。夫より山鳥の尾張の國の人にあふ毎に、此事うち出でて問ひはべりければ、金森桂五兔の裘にはあらぬ、「鶉衣」といへるもの二卷をもて來て見せ給へり。翁亡くなりぬと聞き、なほ馬相如が書殘せるふみもやあるとゆかしかりしに、細井春幸、天野布川に託して、其門人紀六林の寫しおける全本を送れり。卷返し見はべるに、から錦たまくをしく、頓に梓のたくみに命じて、是を世上にはれぎぬとす。翁の文におけるや、錦を著てうはおそひし、方なる袖を圓になして、よく人の心を寫し、よく方の外に遊べり。鶉衣の百結とは、自らいへる言の葉にして、狐のかはのちの黄色にあたらざらめや。右のたもとの知き筆はなえたるも恥しけれと、たゞにやはと、けにもはれにも書いつけ侍りぬ。

○五葉松序



狐のかはの  
一素の昭王  
價千金の狐  
の裘を藏せ  
し故事  
二葉の松の  
一一つとや  
の文句をと  
る  
さかゆく里  
一吉原  
今日ゆづり  
葉を一今日  
譲り受け  
十七日の手  
紙一蕤之の  
眞跡  
二の町の文  
一第二流の  
手紙一源氏  
物語に源氏

二葉の松の色ようて、三つ葉四つ葉の殿作り、さかゆく里にひとしほの、色そふ君の名寄の株、けふゆづり葉を口にふくみ、五葉の松と題せしは、松にからまる蔦屋の板。是は正直正銘の、相違あらざる自筆の文、返すくも十かへりの、花のお江戸の大都會、江口神崎はことふりたり、島原新町はいざしらず、千代萬世もよし原細見、これより毎月あら玉の、としのはじめの常盤の松、つきせぬ下葉をらよつとかく。

### ○馬蘭亭舊友尺牘帖後序

王羲之が十七日の手紙は、唐机の上にあけられ、光源氏の二の町の文は、雨もりの腰張にすまけたり。かの顔氏が家にをしへけん、尺牘書疏は千里の面目にて、「雲州消息」三「月庭訓」も、もとは錦帯のくじら帯、これも去年の品川の噂、五十の翁のくり言なるべし。そのくり言はやめにして、夕霧が富士の山を張抜きたらん文の数はいざしらず、うぐいではかどらぬ、かほよ御前の用事にはあらぬ、近比世に名だたる狂士醉客の書簡を、一駄ほど、馬蘭亭のあるじのあつめ置きしを、馬の尻の後序ともなれかしとて、もえ杭に火のつきやす、古川に水たえず、筆をとれば物かゝれ、盃をとれば何時でもかくのごとし。

が祕藏の手紙は深くかくして第二流のものを手近におきしこと  
 顔氏―顔之推  
 富士の山を張抜き―伊左衛門の文句  
 とりて―忠臣藏の文句  
 清女がすみ―春は曙  
 狭衣の發語―狭衣物語  
 の開卷、少年の春は惜めどもとま

○筆はじめ

春は曙やうく懸取を戻してより、雑煮の餅も咽につまらず祝ひ、銀燭と詩に作れば子細らしけれど、古行燈の信田づまとも化けさうなるを、梯子の下にかたよせ、やぶれ障子はれぐと掃出すべきを、元日なれば帚もとらず。陳子昂が福如東海と書きし掛物、目ざしのむきみ馬鹿がたけれど、初春の延喜を祝ひて、あやしき三尺の附床にさらりとかけ、伊豫簾は却つて巻きあけたる庭の景色。そゞろごとこの浮み出るを、試筆とかいひてしたりがほに書きつけたるも、大つごもりの苦しさを忘るゝに似て、巨燧辨慶とや笑はれなんとをかし。されば清女がすすみも「狭衣」の發語も、少年の春をめぐるはなく、いつも嬉しき正月心に、願はくは二十年あとへ、猿江りのごと滑りかへれと、我のみ思ふかも。

○吉書初

大晦日の装束櫃に狐火を見んといひ、洲崎の日の出を七つ起きして見んといひ、二日は

らぬものな  
りければ  
装束櫃一東  
京府下王子  
にあり、大  
晦日の夜、近  
邊の狐、こゝ  
に集りて櫃  
を飛び超ゆ  
るといふ俗  
説あり  
白髮三千丈  
一縁愁如斯  
長、李白の  
句  
裏皮一三味  
線の胴のう  
らに書を求  
むるなり

茶屋にゐる日の約束も皆あらまじごとにて、年禮の膝くり毛に鞭うち、日傭のかみの諸太夫を召しつれて、玄關の式臺のあがりおりに、二三日の光陰を費しぬ。もういくつ寝て正月と思ひしをさな心には、よほど面白き物なりしが、鬼打豆も片手に餘り、松の下もあまたまび潜りては、鏡餅に齒も立ちがたく、金平牛房は見たばかりなり。まだしも酒と肴に憎まれず、一盃の酔心地に命をのべ、一椀の吸物に舌をうてば、二丁鼓の音をおもひ、三線枕のむかしを忍ぶ。やみなんく。我年十に餘りぬる比は、三史五經を經緯にし、諸子百家をやさがしして、詩は李杜の腸をさぐり、文は韓柳が髓を得んとおもひしも、いつしか白髮三千丈、かくのごとくの親父となりぬ。狂歌ばかりはいひたての一藝にして、王侯大人の懸物をよごし、遠國波濤の飛脚を勞し、犬うつ童も扇を出し、猫ひく藝者も裏皮をねがふ。俳優人の羽織に染め、うかれめの晴衣にも、そこはかとなにかいやり捨てぬれば、吉書はじめともいふなるべし。

○鶯笛といふ笑話の序

春の山の端のわらひ初めて、雪間の氷うち解けたるに、梅が香いきを吐きかくれば、柳

の糸も腹筋をよる。笑ふ門には福壽草、三つ葉四つ葉とさき草の、はなしの種を蒔初めて、花さく春を待つものならし。

○山東京傳畫美人合序

千枝つねの  
 リー王朝時  
 代の名畫家  
 五の町一吉  
 原五ヶ町  
 暹曙も一古  
 今集序に暹  
 昭の歌を詠  
 して、畫に  
 かける女を  
 見て徒に心  
 な動かすが  
 如し

花の色をうつせるものは、その匂ひを繪がく事あたはず、月の素を後にするものは、その明かなる影を得る事難しとは、唐囀の言にして、鳥が啼くあづま錦繪は、柳櫻をこきまぜて、都の春の遊び物とし、千枝つねのりもおよびなき、時勢の粧ひを盡せり、わけて姿もよし原や、二の町ならぬ五の町に、名だたる君の形をうつし、それがおのの自らの、水莖をさへ添へたれば、物いふ花の匂ひをふくみ、晦日の月のあきらかなるがごとく、見るに目もあや心もときめき、魂は四つ手駕籠とともに飛ぶこころし、身は三つ蒲團の上にあるかと疑ふ。斯くうつくしき寫し繪には、僧正遍昭も徒にこころを動かし、吉田の兼好もつれなくを慰めざらめや。因て此はしつ方に其ことわりを書きつけよと、五葉の松の蔭たのむ、薦の唐丸がもとむるに、稻舟の否まんもをこがましければ、猪牙舟のちよつきりちよつとつくり出て、立ちならびたる中の町、櫻の花のかたは

さる人—伍  
 子胥  
 蘆の葉の笛  
 をふき—謠  
 曲猥々の句  
 蘆火淺水—  
 火は花の誤  
 杜律—暫時  
 花戴雪幾處  
 葉洗波  
 米顛—米苜  
 紫塵—朗詠

らに、深山木ともく、すつとみやまの山の手から、こはく筆をふるふにこそ。

天明四つのとし辰の初春

○八月十五夜蘆中の月をめづる言葉

蘆中の人くくとよばれしは、向うの人くくのそれにはあらで、吳の東門に目薬の看板かけし、さる人のことになん。潯陽の江の邊には蘆の葉の笛をふき、難波の賤の一節には、蘆苳の名を傳ふ。蘆のかり寐のひとよゆゑとは、百人一首の耳近く、あしの花ちる遠干潟とは、「老葉集」でちと耳遠し。抑天地ひらけしより蘆がびの如くなる。豊あし原の中津國に、名だたる蘆づつの親類よりしたしき友どち、今日の天氣をうらやみ、蘆屋の道滿大うち鑑、大うちよりて月をかながみ、あし屋の里に蘆火たく、蘆の丸屋の原庭の、蘆のうちには圓居しつゝ、蘆葉の達摩の禪にもあらず、蘆屋釜の茶人でもなく、蘆火淺水の舟さす漁父とはたしか見しり越、あし手にかける大和詞に、蘆荻の花の杜律をかじりて、蘆花の雪をほしいまゝにする。米顛が草書になぐり、紫塵のわかき手を握る色氣はなけれど、碧玉の寒き蘆、錐の囊のもぬけの才子、蘆水がかきし兩岸一覽、月の最中の中の

に、紫塵嫩  
藏人季手、  
碧玉寒蕙鍾  
脱囊

美人―美人  
天上落、唐  
詩の句

粥腹得心―  
貝原篤信の  
もじり

郷に、あし分舟をさしいれて、蘆毛の駒の足並に、てる月なみをかぞへこん、片葉のあ  
しの片手わざには、此頃世上にもてはやす、五箇の冊子の一箇の奇會、畢竟一部の西園雅  
集、あすは東渡の分解を聞け。

○讀阿多福面

夫美人は天上より落ち、牡丹餅は棚から落つ。さればさかさにつるす硝子の危からんよ  
りは、立白にまく薦の全からんにはしかじ。此おたふくの面もかぶらず、罷出でたる教  
訓本、詞のはなは卑しといへども、燈籠鬚の透間かぞへて、二枚櫛の齒にきぬ著せず、羽  
子板の殿さまかみさま、駒下駄の娘子達、意見をたまの上になさす、かんざしの耳搔より、  
耳つとう世の諷諫ともなれかしと、今大通の通の中へ、この一通を書残せしは誰そや。  
破鍋にとち蓋すてふ、粥腹得心が腹ふくるゝわざなればなるべし。

○狂歌の反古あつめたるものの跋

花はさかりに月は隈なきをのみ見るものかは。その花も根にかへり、月も山に傾きぬ。  
今この一卷を見れば、けに花ならば花筐、月ならば影法師。

論語―孔子曰く、繪事は素を後にす、子貢曰く、然らば禮は後か、子曰く賜やはじめて興に詩を言ふべきのみ  
壺屋―勝川春章

よものともめがす下

○春の遊びの記

論語しらすの言葉にも、繪の事は素きを後にす。曰く、お禮は後の事かと。上下袴かち栗も、歳神の棚へあけて、白衣の三人御見舞申す、頃は安永八つの年、睦月はじめのよかの日、御代はめでたの若宮のほとり、萬よしだの何がしにて、寫繪の書きぞめあり。御座敷の上客は墨繪の雲のごとく、御勝手の膳部は彩色の繪具皿に似たり。皆ひとはけの霞をくみ、硯蓋に燒筆をたつ。隣松が畫がける松魚は、左慈が鱸よりあたらしく、蟪車が役者の似づらには、壺屋が壺も底ぬけなるべし。蘭雨のおとり持、御舎弟のおとり込み、銚子のかはりは袴をぬぐに暇なく、盃のまはりは錢ごまもはだしなるべし。上戸は酒を飲み、中戸は飯をくふ。下戸は肴をあらしふく、三宗の山の紅葉の色にけおされてや、小松はみどりの龜の尾を、泥中にひきしりぞき、雁奴も同じひとつらの、越路のかたへや歸りけん。跡に残りしかの三人、橘の小島を先として、朱鷺菅江くわんく」と

長居すれば、四方のあからめも無く、歸る方角を失ひて、東方の明くるも知らず。やゝありて銀燭天井にかがやき、花氈地上に滿ち、棧敷の障子に穴ほちくとあき、樂屋の咳ばらひゑへんくと高く、三絃長唄はやし方などいへるもの、列を正して居流れたり。先一番に劔烏帽子とかやいふめる唄にあはせて、あたりも照葉のさかづきを、ひとさし舞ひしなりふりに、思ふ心のあればこそ、跡のくの名にしおふ、いざござなしに都鳥の一曲、業平も氣はありやなしや。次に吉原すゞめの、品よくとまりし竹の葉の、みだれし髪もいはけなき、乙女の姿やこしばし、感するも猶あまつ風、雲のかよひ路吹きとぢし、樂屋の唐紙さと開きて、二八ばかりのたをやめ、燈籠鬘の透額、烏帽子水干きの國の、道成寺へと舞ひ出たるにぞ、作りし罪もきえんととして、君が名字のよだれをながし、名さへおみきの酔心地、思へばこの子の金箱を引かついで失せまほし。今迄あるじの繪にかける女を見てさへ、いたづらに心を動かせしに、これや誠に正のもの、を正で見たりし諸見物、僧正遍照から五節句をとり、祇王祇女の真中へ、佛の來迎し給ふがごとし。長唄いと竹鼓やうのもの、皆世の中のえらみを盡したれば、梁の塵も散り、空行く雲も閑雲となり、ひたのみにのみ、たゞくひにくひ、無遠慮に腹打たゞき、

作りし罪も  
きえぬべし  
―道成寺し  
の文句  
思へば云々  
―思へばこ  
の鐘うらめ  
しやとて龍  
頭に手をか  
け飛ぶよと



見えしが引  
かづいでぞ  
失せにける  
(同上)

伊勢―伊勢  
物語  
狭衣大將―  
狭衣物語  
名におふ集  
―万葉  
大寺の―相  
思はぬ人を  
思ふは大寺  
の餓鬼のし  
りへに類づ

方外に口うちたまく。門松の葉の散りうせず、わかざりのわらながき夜の、とをのねぶりのさめやらで、千秋樂をや謠ひけん、萬歲樂をや奏でけん、一向酔うて知らずかし。

右は畫人東牛齋蘭香畫の書初の夜の事になん。

○狂歌堂に判者をゆづること葉

いにしへもかくや戯れけん、今もかくこそ戯れけれ。抑久方のあまの岩戸の俳優に、おとがひのかきがねをはづさしめ、あらかねのつちの形を蜻蛉の舐唇とみたまし〜くき御利口こそ、神も人も戯れたることのもとなりけれ。かゝれば代々の物語にも、伊勢の飯匙つくも髪、「源氏」のひる食未摘、狭衣大將のいたち笛吹き猿かなつなど、滑稽のとりのなれや。さるを歌によみ出づる事は、ならの葉の名におふ集には、大寺の餓鬼のしりへに類づき、夏やせによき鰻とりめせなどの類あまたなるべし。「古今集」えらばれし時にぞ、誹諧歌の一體を立て給ひき。これなん狂歌のはじめともいふべし。是よりのち代々の撰、家々の集に載する處、擧げて數へがたし。まことや水無瀬の離宮にして、有心無心のふたつの姿をわかちたまひしぞ、栗の本の面目なるべき。あるは百酒の味をな

くがごと  
夏やせに  
石麿に我物  
申す夏瘦に  
よしといふ  
物ぞ鯉とり  
めじ  
水無瀬の離  
宮にして  
後鳥羽院の  
御催し、無  
心栗の本は  
狂歌方  
さるもの  
曉月坊  
也足軒  
院通勝  
長頭丸  
永貞徳  
半井氏の子  
古今後撰  
古今夷曲集

めしさるものの子には、定家卿の力のほどを見せたまひ、あるは三井の深きを汲める、雄長老の「百詠」には、也足軒の判のことばを添へ給ひき。其外長頭丸を頭として、郡山の自歌合をむすべる八百首の歌、入安が大坂の雲井はるかに、未得が「吾吟」の山田歌にも、其世のふりは思ひやらるゝよ、かの半井氏の子などは、彼をさへやく。かけまくもかしこき何某の院の第八の宮と聞えしは、あやしく戯れたるかたに御心をよせ給ふとぞ。此時にあたりて難波の行風といへるもの、「古今」後撰の二つの集をえらびて、かの宮にさゝけしかば、院の御所にめでさせ給ひて、始めて夷曲とも、夷歌ともよぶべしといへる、みことのりをさへ下し給ふぞ辱なき。しかるに「新撰狂歌集」には、落書を書きまじへ、「銀葉夷歌」の頃よりぞ、金の響もうつろひにたるに、言因とかやいひし痴者、いかなるゆゑんの侍りしや、雲の上まですみのほる、煙の名をたてしより、其流を汲み、其泥をあくる輩、京わらんべの興歌などいへる、あられもなき名をつくりて、はてくは何の玉とかいへる光なきことの葉も出来にけり、鳥がなく東ふりは、わづかに二十年ばかりこのかた、我輩よりもてはやして、其名聞ゆる人々、のべの紙の風に吹き散り、林の杉の葉門々をたてたれど、四方の巴の扇の紋、赤とのみおもひて、其味知らぬなる

後撰夷曲集  
いかなるゆ  
ゑん一月な  
らで雲の上  
迄すみ上る  
これや如何  
なるゆゑん  
なるらん

(真柳)

陸羽一宋の  
有名なる茶  
人

おして一印

ふるき甌一

普書王獻之  
の傳に、甌  
甌は我家の  
舊物

東岸一朗詠  
に、東岸西  
岸之柳速速

べし。爰に鹿津部真顔ふかく數寄屋の河岸にありて、西河の思ひ淺からず、すでに狂歌の堂にのほれり。其室に入らんの志、いたく切なるに愛でて、玉笥はこ傳授めくもをこがましけれど、鳥の跡久しきものながら、馮婦が手うちけんとの歳のはじめ、河原崎の翁わたしとともに、三體の傳ことごとく傳へぬ。われすでに此道を捨てて、陸羽が「毀茶論」の思ひをなせれば、さいつ頃何がしのもとめによりて、おしでは人におくりぬ。なほ吾家のふるき甌と、秘め置きし文机一脚にそへて、此一巻を與ふ。今より四方の道しるべをとばば、兩をさせる小車の、わが一流の狂歌堂なるべし。

欲問狂歌堂

先開枝折戸

寄語諸連中

勿迷四方路

### ○二水樓記

東岸西岸の柳橋は、淺草のはつかに見わたされ、南枝北枝の鑑梅は、兩國の橋の上に絶えず。駒とめ橋の駒に鞍おけといふ山里の使來りて、藤代町の藤の紋に、あるじの家の名もしるし。春はやうく霞わたれる川面より、夏の涼はおほよそわが國六十餘國が中に、いづくはあれど兩國に如くはあらじ。よし野高尾の舟屋形、玉屋鍵屋が花火船、秋

の月冬の雪、この二水のほとりに盡きたれば、二水樓とも呼ぶなるべし。

○角田川に三船をうかぶる記

遠くいにしへを仰ぎ、近く今を思ふに、山城の國大井川の水上にさかのほれば、詩歌管絃の三つの舟をうかべ、言さへぐ唐國米内史の好にしたがひては、文とうつし畫のふたよの蘆の葉をたゞよはす。あるは敷島の道にたどりて、唐詩の林にたちまじはらざりしを悔い、あるは蘭亭のいしぶみを奪ひて、うたかたの水に消えなん事を思ふなど、すびの松の葉末の人は、椎の木やしひてもとめず。あまざかる火なほ箱を枕として、伏猪の船の夢にだも知らざりけりな。爰に鳥が鳴く東ぶり家々にとなへ、をそのたはれを道々に好きてより、いにしへ今のことぐさを、行きかふ蟻の穴ぐり求めて、朝餉の箸のあけおろしにも、こは珍らかなりかは新しなど、えみ栗のてうち鳴らし、うち柿の熟柿くさく、果は盃のそこともわかぬどち、から錦たちきられぬ事をなんなせりける。ことし水無月の暑をさげんと、かの中川の方違も、しうとのもののゆかりあればにや、鳶のから丸がそゝのかしきこゆるに、あし引の山の手都合よく、馬喰町の口々に言ひのまし

不同、南枝北枝之梅開落已異  
山里の使  
花さかば告げんといひし山里の使は來たり馬に鞍おけ  
大井川の水上―藤原道長大堰川に遊びし時の事  
米内史―米芾  
敷島の―上の大堰川の時公任和歌の船に乗りて詩の船に

乗らざりし  
 を悔ゆ  
 蘭亭の米  
 芟船中に蔡  
 攸に謁し攸  
 の有てる王  
 羲之の書を  
 乞ひ、與へ  
 ずんば水に  
 投じて死せ  
 んと強請し  
 僅に之を得  
 たり  
 すびの松一  
 首尾の松  
 椎の木一隅  
 田川の東岸  
 にあり、首  
 尾の松と並  
 びて江邊の  
 名木たり  
 えみ栗のて

り、數寄屋のすきにすきたる戯れうたびと、武藏の國と下總の國の中川に、みつゝの舟や  
 かたをうかべ、歌は心なきをすがたに、詩は狂へるを旨とし侍りき。絲竹こそ猶豊原の  
 流につぎて、さだすぎたる限りをつくすべきを、もろこし何がしの國のかみすら、いに  
 しへの樂を聞きて眠り給ひしとなん聞けば、神樂のもとするたしかならんは、五節の  
 舞姫の花やかなるに如かず。名管、祕曲の手をつくさんは、三筋の絲の心ゆくに如かじ  
 と思ひおきて侍りて、柳橋のまゆに籠れる、親のかふ子のよきをえらみ、やぐえん堀の  
 ほりするものに、大みきのさゝ執らせつゝ、詩をもて歌にあはせ、歌をもて詩に番ひ、勝  
 てるは誇らかに鼻をこめき、負くるは罰の盃を受く。其の争はまめ人のすさみにして、其  
 遊びは古のたはれなり。たとひ山水のきよき音のみめでし梁の太子の嘲ありとも、ひが  
 し山に白拍子めしたる、高潔翁の頷くところならし。然りやあらずや。

左方人

右方人

各賦狂詩

各詠狂歌

飯盛

丸

眞顔

金埒

て一舟波に  
名物てまう  
ち栗あり  
中川の方違  
一源氏物語  
の故事  
心なき一無  
心體(狂歌)  
豊原一朝廷  
の樂師の家  
何がしの國  
の守一魏文  
侯  
高潔翁一東  
山に妓を携  
へし晋の謝  
安  
此君一竹

|   |     |   |   |   |   |   |   |   |
|---|-----|---|---|---|---|---|---|---|
| 秋 | 古人有 | 三 | 唯 | 躬 | 酒 | 講 | 讀 | 判 |
| 人 | 正   | 和 | 取 | 鹿 | 船 | 師 | 師 | 者 |
| 光 | 裏   | 米 | 高 | 森 | 唐 | 紀 | 鹿 | 四 |
| 住 | 人   | 人 | 彦 | 角 | 丸 | 定 | 津 | 方 |
|   |     |   |   |   |   | 丸 | 部 | 赤 |
|   |     |   |   |   |   |   | 眞 | 良 |
|   |     |   |   |   |   |   | 顔 |   |

○此君盃の記

道中雙六の振出しなる橋の邊に住める、月知とかや言へる人、四方赤良が書きおける、  
「七賢圖式」を見て、ひとつの盃をおくれり。盃中に竹をゑがく、よりに名づけて此君と  
いふ。それ盃は様々ありて、羽觥、玉爵、あふむ盃、金屈卮など、見ぬ唐土の京物語に

汗尊杯飲一  
禮じ、汗尊  
而杯飲、注  
汗尊鑿地爲  
尊、杯飲手  
搗之也  
べく盃一底  
に穴ある盃  
一つの隅を  
あけて一論  
語に、一隅  
をあげて三  
隅に及ぶ  
何某門院一  
東福門院  
黒木の詠一  
黒木めせめ  
せく黒き  
ささなめ  
せ、こくも  
薄くもきこ

て、其かたちをだにわいだめず。我日のもとにいにしへは、汗尊杯飲の風すなほにして、土器のみ用ひたり。されば三つ組のみつ指にて、左様しかればの挨拶も、候べく候のべく盃となり、引くに引かれぬ引盃は、さいつ押へつあひの手もとに、入りくる入りくる大盃、百樂のてうどうけて、椰子の毒けしを頼み、しつほく臺の一つの隅をあけて、こつぶを三つの隅にめぐらす。何某門院の黒木の詠は、大原盃の製をのこし、難波江のうかむ瀬も、淺草川の淵と變ず。たとひ時酒移りうまごと去り、たのしみかなしみ行きかふとも、天さへ酔へるはなの朝、頭もふらつく月の夕、雨のふる日も雪の夜も、日々酔うて泥のごとく、一年三百六十日、一日も此君なかるべけんや。

此君はいづくよりぞと問ふたれば笑つてこたへす心かななべ  
君ならで誰れかはくれん吳竹の色をも香をもさかづきぞ知る

### ○談洲樓記

豎川の流れ市川に通じ、聲と響の相生のまちに、談洲樓といへる高どのあり。一たび此樓上によれば、三階の高きに登りて、登ればくだる稻荷町の情を知り、大日本の東側よ

し召せく  
 大原盃一平  
 盃中に黒木  
 の蒔繪あり  
 うかむ瀧一  
 盃の名  
 笑つて一  
 而不答心自  
 閑(李白)  
 堅川一談洲  
 樓焉馬本所  
 堅川のほと  
 りに住す  
 三階一芝居  
 の  
 稻荷町一  
 下  
 まはり役者  
 橋柱に一司  
 馬相如故郷  
 を去る時橋  
 柱に題して

り、天地の大芝川を見るがごとし。嗚呼此樓の高き事、あるじが自慢の鼻柱。はなの高  
 いはたらちねの、譲りものせし飛弾たくみ、うつすみかねの筆とりて、帆柱にぞる橋柱  
 に題せし、夫は司馬氏これは焉馬子。合せて「兩面年代記」のむかしより、「碁太平記」の  
 宮城野を、しのぶにあまる誦路の露、萩に薄に玉菊が、狂歌燈籠數度の月、いま酒力さ  
 め茶番歇んで、只牛島の牛のよだれ、長きはなしの種のみぞ、洲崎に立てる松のはの散  
 りうせず、はく事は長鯨の汐をふくがごとし。談天の衍、雕龍の爽、甌の油しほれども  
 盡きず、大鏝屑の粉いはばいはれん。たとひ蘇秦張儀がさかやきを刺り、富婁那子貢が  
 皮羽織きて、夫子を以て鐵棒とすとも、主人の舌を卷物の、「太平樂」に及ぶべからず。か  
 の晋人の清談などは、錢ごまのはだしなるべし。嗚呼つがもない。

### ○里の花燈籠の記

九の枝をつらね、萬の燈火をかまけしは、見ぬ唐土か西域か、日本堤の二のかはり、三  
 河屋の燈籠見んと、きつくなれにし北の里、はるくきぬる旅ならで、うかれ女の道中  
 姿、たちならびたる家々の、ともし火の花の傍に、みやま木ならぬ山人の、ひなぶりを



騮馬の車に  
乗らざれば  
再び渡らじ  
といへり  
酒力さめ—  
岳陽樓記の  
句  
九の枝—九  
枝燈檠夜珠  
圓重詩の句  
酒上不埒—  
狂歌師の名  
大極上、黒  
吉、上々—  
役者評判記  
の位附  
向う—「向  
う通るは清  
十郎じやな  
いか笠がよ

書いつけてよと、二日酔のさけの上、不埒の大人がふらくと、たしか求めし約束は、  
ほんく盆の今日あすと、團扇太鼓のうちすて難く、釣燈籠の手柄のあそ、高燈籠の松  
のやかた、山の手の舞どう籠、名に高彦の揚燈籠はいふもさらなり、八百八街のはじめ  
におす、手ぐるまの本つ町、おほんたからの宿りとる、かり草の馬はむ町、馬に鞍置く  
くらやみの、恥かはしき言の葉を、四方のあかるみになひ出る事とはなりぬ。もとよ  
り數寄屋燈籠のすきめなき、切子のあみの目に觸れなんは、はづかしのもりならぬ、水  
ぶつかけの釣瓶てふ、名に大門のそばきりそうめん、御免候へ、たわいくとしかいふ。

○岡目八目 草雙紙の評判記也

右に見えたる位附、大極上や黒吉より、上々等にいたるまで、かならずあてにし給ふべ  
からず。御句到來次第不同、にくいくはかはいの裏、善惡不二の片手打、拍子を揃へ  
て打つておけ、しやんと小褌をとらの春、正月二日の初夢見て、とんち早咲早梅の、う  
み出したる趣向なれば、三千世界を尋ねても、こんな作がと人さんが、笑はんすのも大  
事ないが、そりやこそ鳴いたは透頂香、波錢一本うそ八百本、向う通るは清十郎じやな

う似た菅笠  
がし  
つうる一編  
つかひ果し  
て一傾城戀  
飛脚の文句  
島さん紺さ  
ん一道中の  
旅宿の留女  
の客をよぶ  
詞  
したくび一  
願の垂肉、  
狼は急ぐ時  
前進にはし  
たくびを踏  
み後退には  
尾を踏むと  
いふ

いか、笠がよう似た花菖蒲、いづれあやめとひきくを、頭にいたゞくつうるの羽重、  
千秋の雲晴れやらぬ、臘夜のつれづれなるまゝに、青柳硯に向ひ、一寸二寸三寸の、つ  
か短かなる筆と墨、つかひ果して一部の書と、ならの旅籠や三輪の茶や、合の宿にて臍  
村の、おかけで腰が抜參り、島さん紺さん中乘山人、おつづら馬の後に記すと、敬つて  
ごさへすヨヤヨウ。

○狸の圖贊

一荷の土船の危きに乘らんよりは、八疊の金玉の安きに座せんには如かじ。狼のそのし  
たくびを踏んで、其尾につまづかんよりは、己が臍に茶をわかして、文福の毛をはやさ  
んには如かじ。

ことぶきを長地にうつや腹つゞみたんく狸ちま千歳經ん

○狸々贊

あしの葉をふき、竹の葉を酌むあしの、よもつきじ。竹のよもつきじ。

相生町一馬  
馬の住所  
焉馬のあや  
まり一相似  
のあやまり  
を烏焉馬の  
誤といふ  
催馬樂の  
催馬樂に、  
力なき蛙骨  
なきみとす  
鄭門云々一  
左傳に、初  
内蛇與外  
蛇、鬪於鄭  
南門、内蛇  
死、不踰年  
而厲公入

### ○織物の贊

相生町の松にはあらで、竹屋町のきれを織出して、柳櫻の錦にかへ、書畫の床の詠めとなさんと、思ひ月夜の烏亭のあるじ、焉馬のあやまり更になし。竹屋町く、此君なくばあるべからず。

### ○蛙の贊

花に鳴く鶯にともなひては、催馬樂のちからなくして、あめつちをも動すべく、月の柱もをりを得ては、不死の藥をまどかにして、おのが齡も久かたなるべし。むしろ香山の石となるとも、ゆめく鄭門の蛇にならふ事なかれ。

### ○七拳圖式

唐山にては酒令といひ、吾朝にては拳酒といふ。天然にては酒のむもの、五百生が間手のなきものに生れしゆゑ、此拳の沙汰を聞及ばず。抑此七拳は、もろこし晋の七賢の直

いけどりー  
池、生捕

あからさま

—あか(酒)

白地

十目の……

よろ／＼と

—大學の文

句に擬す

儀狄つくり

—禹の時儀

狄酒をつく

る、禹飲ん

で之を甘し

とし、曰く

後世之によ

りて身、過

つものあら

んと

傳でんにして、竹の林のふしはかせ、聊いさ、かき相違ちがひなきもの也。今幸に一巻を得たり。つらく、閱びして其傳の絶えなんことを、伊丹諸白、鴻のいけどりの圖式をあらはして、四方のあからさまに弘ひろむといふ。夫賢それ、けんは拳けんなり。十目のちらつく所、十手の指ゆびさす所、それ拳なる哉。富とみは酒屋を潤うるほし、徳利とくりは身を潤うるほす。心廣ひろく體ていよろ／＼と、足もとのさだまらぬこそ、上戸じやうこはよけれ。

○新酒頌

酒々、儀狄ぎてきつくり大禹管たいうぎんむ。古ふるきは新あたらしきに如しかず。重おもきは輕かろきにしかず。輕かろく清すめるものは、暫時しばしばの頭あたまにのほり、重おもくにござれるものは、二日ふたつか醉まひの枕まくらとなる。たちまち醉まひたちまち醒さむ。日々に新あたらにして、又日々にあらたなり。

○風流 狂歌盃報條

そも盃さかずきの濫觴らんしやうは、ちよくらちよと之これをかう持つて、三日みかづ月づきなんどの形かたちを表あらわし、左ひだりのきくは天あまの道みち、底そこをしたむは地ちのきよめ、天地あまのつちのあい手本てほんとなる。人と生なれて酒さけのまぬは、

ちよくらち  
よと云々―  
宴席の戯の  
詞を借る  
内ぐもり―  
土器  
小原―盃に  
小原形あり  
卯腹辰股虎  
せなかは灸  
治の常言

玉の扨かづきかつちりのごとし。見ぬもろこしには金屈扨きんくくし。わが日のもとには内ぐもり、其土器らけのすなほなる。ためしを今に引盃ひきさかづき。又三組みつぐみの三指みつゆびより、候まうべく候まうのべく盃さかづき。小原たつもくとらまへて、酒のませんとの一興いっけいには、狂歌きやうかをよもに過あやさるべしと、例れいの赤良あからの筆ふでをかり、すむむる酒の徳孤とくこならず、かならず隣となりの松蔭まつかげも、今一いまひとしほの色いろを添そふ、枝えだも榮さかえて葉はらしける、千代ちよのこのく盃さかづきが、まはつて來きたはく。まはらぬところは御目みめ長ながに、御覽ごらんの通り狂歌盃きやうかさかづき、よいもわるいも御手かてにとつて、たゞよいくと御評判ごやへんぱん奉希候ほうきこう以上。

### ○土佐の麻衣報條

神樂かぐら催馬樂さいば今様いまようのむかしはいざ知らず、近頃世ちかごろよにもてはやせる淨瑠璃じやうるりとなん言いへるものは、琵琶びわ法師はふしの「平家」にならひ、六十帖むそじの事ことをつらね、「源氏」とよべるとなん。この二つは話うたひものの父母ちちははとして、此道なこみちの難波津ななば淺香山あさかみやまともいふべし。しかるに「源氏十二段」といへる物語ものがたりに、淨瑠璃じやうるり御前ごぜんの事ことを述べしよりこのかた、源氏げんじをあらためて淨じやうるりと呼よべるとぞ。武藏野むさしのの廣ひろきおほん惠めぐみしけく、角田川かくたがはの水みづひとたび清すみしより、太平たいへいの代よをう

受領して—  
官名を授か  
りて

ゑいと—  
繪にかけた  
り

たひ物せし、江戸節の元祖を筑後といふ。其子虎之助受領して土佐少櫛橋正勝といふ。これより其の流れ千筋にわかれ、岷江の底なきがごとし。今其源にさかのほれる内匠はしらふかく此道に耽りて、受けつぎし家の風を普く世にも吹きつたへんと、ふたつの國の橋のほとり、萬代の龜屋てふ高どのに、波のあやつりをりからの興を添へ、柳の絲道長き日のなぐさめと爲さんとす。斯れば花の江戸に有りとしある人、八百八街に住むとし住む人、東錦のゑいと—、朝は疾うから集はざらめや。

○壁 書

へ  
尻をひらば尻をすほめよ。毒を食ふとも皿をねぶることなかれ。一寸さきを闇と思はば、  
天道人を殺すべし。

○三谷 吉原細見説  
傳來

此里こゝにうつりてより以來、延寶に「吉原戀の道草」ありて、淺草橋より大門口迄、輕  
尻駄ちんのあたひを記せり。三人づれにて馬一疋は、「塵劫記」のりかへなど、土手ぶし

庄司一基左  
衛門、吉原  
遊廓の開創  
者  
新命婦、大  
正一板元の  
名  
武左一野暮  
な武士  
いなさ細江  
一遠江の名  
所  
楚王の一楚  
王細腰を好  
んで宮中に  
餓死多し

に謠ひしもをかし。元祿の「吉原草摺引」、寛永の「吉原大黒舞」、享保のはじめの「丸鑑」、是等は其名を記すのみにあらず、其姿心ばへ迄あからさまに品定して、今見るがごとし。「源氏」の雨夜の物語、曉傘をかはせたる頃なるべし。其外にも「兩巴扨言」は大人先生の筆をふるひ、「洞房語園」は庄司の家になれり。抑吉原細見は、始め横本黄表紙なりしが、享保のなかばより唐紙表紙となり、明和の頃よりぞ今のすがたの小冊とはなれりける。新命婦は月々にあらたに、大正は春秋にあらたむ。はた細見と名づくること、大行は細謹をかへり見るか。酔うて茶英をとつて仔細に看ると、唐土人の菊の節句に、森の物や水菓子を見て、つくれる詩にもとづけるや。細身の御太刀の武左にもあらず、いなさ細江の旅人客にもあらず。楚王の好めるおいらんの、ほつそりすわりの柳腰、みかへり柳の惣堀に、細谷川の流れの身、三千の粉黛五町の一廓、醫師の外には乗物を、ゆるさぬ祕傳の御高札、御覽の通油町、五十間からはへぬきの、大木のかげに立ちよりて、からまる蔦屋重三郎、田甫にあらぬ耕書堂、一子相傳祕中の祕説、とつくと細見あられませふ。(エヘン〜と目びねをばづし小湯をのむ。茶わんに黒ねりのふたあり)

○悼大飯食人祭文

水すまば先赤えひをあらふべし、にごらば蛸の足をあらはん、と讀みて、浮世を茶漬一ぱいとも思はざりし大飯食人、かりそめの病にふし侍りしが、つひに北の枕飯となり侍りしと聞きて、例の戯れたる友どち、みそひともじの精進ものに、其人のとしの数も三十五歳のかげ膳をすゑぬ。靈それ知る事あらば、尙はくは饗けよといふ。

○ひとりごと

水すまば一  
風原が漁父  
の辭に、滄  
浪の水清ま  
ば以てわが  
纒を濯ふべ  
し、濁らば  
以てわが足  
を濯ふべし  
みそひとも  
じ一三十一  
文字、味噌  
と葱

素盞鳴尊の月代剃り、衣通姫の革羽織きて、天の浮橋のはしづめに出で、天の八衢につくばふとも、花のお江戸の戯れ歌、よみ出でん事は難かるべし。今の世におほかる大人々々々々々々々々々々々々々々等は、神も御存じなき事なるべし。

○五十初度賀戲文

東方朔は四千歳、三浦大助七十九、浦島太郎が七世の孫は、思ひもよらぬ厄介を引請け



同名の説一  
父子數代同  
名を以て呼  
ばれたりとの  
説

親も嘉兵衛  
一父子同じ  
きをいふ諺  
はし一葉、

箸  
もみぢ一猪  
肉  
鐵砲汁一河  
豚汁

三史一史記  
前後漢書  
古今後撰夷  
曲一古今夷  
曲集、後撰  
夷曲集

夷曲集

たれば、他人にかゝるも同前にて、あまりめでたき事にはあらじ。武内の宿禰の厄拂に漏れたるは、同名の説あれば、親も嘉兵衛子も嘉兵衛かも知らず。鶴と龜より長生なれど、烏に寄する祝といへる御出題もなし。私當年五十になり候。御馴染の御方詩歌連俳狂詩狂歌とも皆御斷也。名代に愚詠一首。

竹の葉の脊に松のはしたてん鶴のすひもの龜のなべ焼

○狂歌三體傳授跋

夫狂歌には師もなく傳もなく、流義もなく絲瓜もなし。瓢箪から駒がいさめば、花がつみを葛蒲にかへ、吸もののみぢをかざして、師走の闇の鐵砲汁、戀の煮こり糶物の質草にいたるまで、いづれか人の言の葉ならざる。されど昨日今日の今參など、戯れたる名のみをひねくり、すりもののはかしの青くさき分際にては、此趣を知ること難かるべし。もし狂歌を詠まんとならば、三史五經を齎の目にきり、「源氏」「萬葉」いせすり鉢世々の撰集の間引菜、ざく／＼汁のしる人ぞ知る、狂歌堂の主人眞顔にとふべし。其趣を知るに至らば、曉月房雄長老、貞徳、未得の迹をふまず、「古今」「後撰」夷曲の風をわ

月をさす指を忘る、禪家の套語

長櫃―橋爲

仲陸奥の國守の任滿ちて上京せし

時宮城野の萩を長櫃に

入れて携へし故事

それ天地は

―夫天地者萬物之逆旅

光陰者百代之過客（李白）

百はたご―安き宿賃

すれて、はじめて共に狂歌をいふべきのみ。いたづらに月をさす指をもて、繪にかける女の尻を抓むことなけれ。これを萬載不易の體といふべきかも。

○長櫃序

萩を姓とし藤を名とし給へる人、戯れたる名を紫のゆかりと呼ぶ。とし頃赤良が筆の跡をもとめて一卷となし給ひぬれば、やがて「長櫃」とは名づけはべりぬ。ゆめく人にもやぎ野の、露ばかりももらし給ひそといふ。

○旅日記のはしがき

それ天地は萬物の問屋場にして、光陰は百はたごの旅人なりとは、沈香亭にもてあつかひし、生酔の名言なるべし。いづれ旅ほどおもしろき物はなし。朝の雪助長櫃の長々と、姫路をとりやるとうたひつれ、夕邊の月びたひ鏡臺にかたぬぎ向ひて、晩におじやれの約をなす。本宿よりも間の宿にぎやかに、名所よりは名もなき所に山のたよすまひ、水の流れと人の行衛の果しなき松原、つか短なる棒ばなに筆をとる。

月びたひ  
旅店の飯盛  
女の形容

度詞どく―かく  
しことば  
黄絹幼婦外  
孫齋白せうはく―絶  
妙好辭の隱  
語

大悲者だいひしや―觀  
音  
とくほん―  
徳本上人、  
當時有名な  
る高僧

○謎の言葉

謎なぞのよりにて來る事久し。「左傳」に山鞠窮さんきくきゆうの度詞どくあり、後漢の世に、黄絹くわうけんとかけて絶ぜつと解とく、其ころは色絲しきなり。幼婦ようふとかけて妙めうと解とく、其ころは少女也せうじよ、などは、此頃の謎なぞに似通にこひたり。其外「瓊瑤代醉編じゆうぎょうだいすいへん」、または「寄園寄所寄きえんきしよき」の類に見えし商謎しやうめいの數々、猜燈さいとうの判はんじ物等ものら、數かずふるに暇いとまあらず。我日わがひの本には、小野おのの筆ふでの無惡善むあくぜんをさがなくばよからんと詠よみ、子子ししの子この子この類るい、「枕草紙まくらぐさ」のなぞ、小野宮右衛門督家おののみやうゑもんとくけ五番三番の「何會なにかあは歌合うたあひ」、つれづれ草くさの馬うまのきつりやう、後奈良院御選ごせんの「何會なにかあ」など多かる中に、慶長の比洛陽ひらくやうに宗鐵居士そうてつこじといふ者あり、謎百句をつくりて「酸物圖さんぶつず」といひしは、羅山先生らざん十八歳の時作り給ひし「謎辭なぞことば」の序に見えたり、其後そのちいつの頃にやありけん、なぞ、なあに菜切なつきり庖丁ばうちゆう長刀ながた、納戸なうどのかきがね外はつすが大事だいじといひし、昔むかしのふりを傳つたへて、寶永の「御所謎ごしよなぞの本」、明和の「讀よみうり謎なぞかけぶし」など、老おいの耳みみにも残のこれるを、今年淺草寺大ことし悲者ひしやの側かたはら、正月屋しんげつやの市いちに先さきだちて、人あまた集あへるを、何なぞと問とへば、陸奥國りくお二本松にほんまつより來れる、都春雪みやこはるゆきといへる盲人めくらの、謎なぞをとく事こと、とくほんの十念じふねんの口くちよりも大おほに都下みやこかに流行

して、辻々に謎の番附を響ぎ、家々に謎の警句を傳ふ。まことに謎の世界といふべし。

○鬼念佛贊

蠻觸の争一  
蝸牛の左の  
角に觸國あ  
り右の角に  
蠻國あり、

蝸牛の角折れては、蠻觸のあらそひ止み、外面夜叉の如しといへども、内心菩薩の道に入れり。身を累染の奉加帳、つくたびごとに奥山の、鐘の撞木はなまいだく。

南無あみだぶつとさとりし發心におにも早速滅無量罪

戦争してや  
ますと、莊  
子の喻

○十三夜十三體 醉月樓會、今岡三體

詩

島臺の野菊尾花の前 卽席詩歌雜俳連 圓子夜中新月後

十三里海鎌倉先

歌

十五夜につぐ山流の琴の曲くもるもすめる長月のかげ

連歌

置く露やしろきを後の月の影

俳

賣りのこる薄に早しのちの月

○謠武藏野

草より出でて草に入るく、月の行衛を尋ねん。是は北國方より出でたる僧にて候。我  
しばらく正燈寺に籠りて、紅葉の落葉を觀じ候ひしが、いまだ武藏野の月を見ず候程に、  
此度思ひ立ち素見せばやと存候。またよき序なれば、千川上水の源をもちきはめばやと思  
ひ候。遣行「あやめさく馬糞の中を立出でてく、驛路の鈴を追分の、宿につき毛や黒駒  
の、甲斐ある今日の門出を、いのる熊野の十二所の、名に高井戸の草深く、はや武藏野  
に著きにけり著きにけり。

○開帳場縁起

是にかけ奉るは、忝も菅丞相、筑紫安樂寺にて御詠歌に、

一口三  
一刀三  
禮を  
拳の詞  
によ  
せても  
じり  
たり

宵の間や都の空に照りもせて心づくしの有明の月  
と詠せられし、この靈驗あらたなる、一拳勝負一口三なの尊像、唐高麗には御座りませぬ。たつた日本に一體の月見でござる。近うよつて拜あられませう。雲切よけの守はこれより出ます。盃は左へくと廻らつしやい。

○錢湯張札

一暮六ツ時より相始明六ツ時迄月見仕候大風大雨之節は相休申候

一足留の御方貳度の月見御無用

一しつひぜん惣て悪敷病ひの御方様岡場所の月御仕舞可被成候

鼻へかゝり候小唄淨瑠璃御免可被下候

一薄三文

一子芋衆十六文

一枝豆附八文

一毎月晦日は闇と御心得可被下候以上

月 日

醉仲間月行事

○御祭禮番附

壹番 勘當町 内は野となれむさしののだし、新造の附祭り、よし原雀の惣仕廻、たいこ末社あまた、もの前てこすり大勢

貳番 いき間町 高慢の萬度鹽やたい、大通人、來朝の體、黒仕立の對の小袖、見え坊あまた

參番 川井新五左町 かつをぶしのだし、淺黄うらついの小袖、すけん大勢

○請狀

差上申御請狀之事

一此照平と申柱男さやかなる影に附我等御請に罷立當丑の八月十五夜より同九月十三

日迄御奉公に月出し申處實正也御給金は價千金に相定爲御取替摺物一枚被下置髓に

請取申候事

一御家之御工夫月見の御趣向爲相背申間敷候若此月見に附外々より如何様の半疊打込

候共我等罷出急度致八分可申候若又鳥影客來仕候はば早速料理方へ可被仰下候はば

新五左一武士を嘲りて呼ぶ名

價千金一春宵一刻價千金  
半疊一申分  
八分一はらひのける

はつこう一  
流行、御法  
度にかけた  
り、御法度  
之切支丹宗  
門(基督教)  
には無之  
候しは奉公  
人請狀のき  
まり文句  
銚子之儀一  
宗旨之儀の  
もじり

其節臺のもの成とも御給仕成共御望次第可仕候事

一御好物様御はつこうのきりしたん棹にてばてれん三味線にては無御座候銚子之儀代  
代上戸宗に而新川満願寺旦那に紛無御座候爲其通帳取置申候後日の月醉而如 管

酒のかん田長のみ町すぶ六店

受人 糟九郎 印  
人主 芋助 印

天明元丑年九月十三日

野島地藏様

御用人中様

○中空 祓

天窓乃上仁酒止利座牽頭茶屋船宿乃命以薄買本平燒鎌乃燒木杭仁火乃附  
安候事乃如又柳橋加買猪牙船鐵砲王仁帆平掛大響如又四手駕乃八乃御耳平振立天  
後乃月見平仕舞給茶屋乃負債平拂給 謹止申須



筑地善閣一  
當時有名な  
る幫間に築  
地善孝あり、それを  
一條禪閣に  
擬す  
あから一酒

十日目三日目晴給部陰利給奈

### ○巴人集後序

「巴人集」は四方赤良が家集なり。按ずるに寶曆本繪草紙に云、鯛の味噌ずで四方のあか、のみかけ山の寒がらす。んびとモ今の本に載する事なし。筑地善閣御説を以て、さまよがどうだと考ふるに、鯛は魚の名、進上目録に云、鮮鯛一折、と是也。みそずは舊説、みそづといふは非也。みそずは味噌吸物の下略。四方は江都泉町の商家にして、酒醬をひさぐもの、赤はあから也。また文選ござ花ござにいはく、宋玉が陽春白雪は和するものすくなく、下里巴人は和するもの多しといへることばあり。四方の家の紋、扇に三巴なり。かれこれ合せて斯くは名附けたるか。或は四方山の話にかけて四方山人ともいひ、或は丈夫四方の志をいだく思われなきにしもあらず。委しくは先の辻番に問ふべし。天明四のとし皐月あまり八日、たれかしるす。

文政二年己卯睦月刻成

中橋廣小路町

西宮彌兵衛

江戸書賈

江戸橋四日市廣小路

上總屋利兵衛

同志 離

四方の留粕終